

神道のお祭りQ&A

神道の「お盆」はどうする!?

新宮神社編纂発行
(南国市十市)

神道家の「おぼん」（盆祭・中元祭）

新暦・旧暦 とも、

七月十三日〓「迎え火」〓墓参りをし、夕方に「迎え火」を家の門前で焚く。

七月十五日〓「ぼん祭・中元祭」（仏〓盂蘭盆会（齋））。氏神の神職を迎えてぼん祭。

七月十六日〓「送り火」〓夕方に「送り火」を家の門前で焚く。

これは、神道家も仏家も同じです。

但し、地域により行う日時が違ってもいる。

関東地域は、新暦七月が多いが他の地域では、一ヶ月ずれて八月が多い。全国的には八月がお盆であり、「夏休み」〓「お盆休み」となる。“ぼんと正月”は日本の大事なお祭りです。高知では八月に行うのを「月遅れの盆」といい、こちらで行うのが多いようです。お盆の詳細は後述します。

・「新盆」は、亡くなった日から一年以内のお盆をいう。

神道では、年の数を数える場合、誕生から死亡日まででは数え年で数え、死亡後は死亡日から数えて祭りをを行う（明治六年の太政官布達による）。

神道家のお盆はどいつするのか？

仏教家とほとんど変わらない。お祭りの仕方が仏式か神式かの違いだけです。それは、古来から日本の生活習慣・信仰として行われていた「ご先祖さまを迎える」という神事・行事に外来の仏教が入り込み時代の変遷と共に融合しているからです。「ご先祖さまをお迎えする祭り」と言うことが解れば、準備もやりやすいと思います。神道では式年祭とほぼ同じです。

お盆は、新盆は勿論ですが、お正月と同じで毎年行われます。

・墓地のお掃除と祭壇の準備

お盆が近ずきますと「墓地の清掃」と「家の内外を清掃」し、祭壇を整備します。祭壇は伝統建築の場合ですと床の間に、そうでない場合は、なるべく祭壇が北向きにならないように注意して設けます。参列者が入れ、神職が祭事を執行出来るスペースをとっておきましょう。

祭壇は、段の形式でも広いテーブル形式でもかまいません。祖霊舎を中央上段に安置、少し前の左右に神を立て、燭台を左右に据え、神饌¹米・酒・餅・荒塩・水・海の物（魚、昆布、寒天等）・山の物（川魚・野菜・果物等）・お菓子等を供えます。

全国的に十三日には「あん付きの迎え団子」、十五日には「白い送り団子」が供えられる。また、「精霊棚」を設ける地方もあり、七夕祭りと同じように竹で棚を作ったり、泥で床を作って、瓜・ナス・スイカ・ほおずき・なし・ブドウなどを供えて迎える場合もある。お供え物は、伝統的な形式があればそれに従って下さい。一般の神道形式では三方四つ五台に載せるようにすると綺麗にみえ、祭りの雰囲気を感じて立っています。花も添えます。

・ぼん提灯等の装飾品

「ぼん提灯」も添えるといっそうお盆の雰囲気があります。お盆にはローソクの火の揺らぎが欠かせませんが、火事には気を配っておきましょう。かつて、数十年前まで土佐では、新盆の墓地には一晩中ぼん提灯がいくつも灯っていました。子ども達には、幽霊やお化け、妖怪の、怖くてしようがないのに聞きたい、お盆ならではの昔話が聞ける、楽しい時季でもありました。お年寄りが庭先で焚き火をしながら話してくれます。焚き火の火だけが、取り囲んでいる子ども達の顔だけをぼんやり浮かび上がらせ、榎木のおきの揺らぎにじっと目線を据えて聞いていました。お盆には各地の氏神さまの境内で一晩中篝火が焚かれていたそうです。現在でも、この「火の行事」が高知県では何処かに続いている神社があるようです。

・「迎え火」、「送り火」

「迎え火」、「送り火」もやり方が地域によって違っていきます。門前に泥や土で焼き場を作ったり、短く細い竹棒に縛って門前の両側に立てたりとさまざまです。

焚くモノは、芋殻（おがら＝麻の皮をはいだ茎）とか松明（松の小さな割板）が使われる。麻芋や芋殻は縄文時代から使われている大事な神事用品。麻芋は神事の神籬や玉串・大ぬさに使われています。お札に「神社大麻」と書かれてもいる。麻は古くから衣料に使用され、神事に邪気を祓い神を迎えるために焚かれました。が、麻酔作用があり麻薬原料として栽培が禁止されている。

「おぼん・お盆」とは!?

「おぼん・お盆」は、6世紀頃に中国から渡来した仏教が、最も大事な日本の先祖の御霊祭りを仏事として行い始めたためと、長く徳川時代に仏教による全人統治が続いたために仏事と誤解される場合が多い。孟蘭盆と言う言い方は、中国で作られた孟蘭盆経から文字が取られたからです。これは、元々、古代から使われていたお供え物を入れる器・ひらか・ほとぎ、またそれを載せる器具を「ぼん」と言う事とそれを備えた祭壇そのモノをぼんと言っていたから「ぼん」孟蘭盆」となったと見られています。バクチや舞台などにもその言葉が生きて使われています。日本の二大祭り「ぼんと正月」は古来から続く祖霊祭であり、同じ祭りを仏事としても行っているということです。

何故七月十五日か? 明治以前は陰暦が使われていました。陰暦七月十五日は「中元」と言われる。いわゆる「お中元の贈り物」の時季です。「中元」という言葉は、道教からきています。道教では一年を「三元」に分け、「上元」(一月十五日)・「中元」(七月十五日)・「下元」(十月十五日)と言う。この言葉がお盆の行事に取り入れたと考えられています。神道では「ぼんの祭り」とか「中元祭」と呼ぶのはここからきています。日本の言葉には本来あるモノを、その時代に合うように外来語をよく使います。一年の中間、陰暦の七月十五日はおぼろな満月です。日本人には祖霊祭にふさわしい雰囲気がある。澄み切った空に上る、一ヶ月後の旧暦八月十五日の満月を「中秋の名月」と感動する日本人。おぼろ月のもとでお盆の響応ののち戻っていった先祖の御霊が清々しく輝いているのを眺め生きる新しい力が惹起されるからでしょう。古代から現代まで生き続ける日本人のDNAの中に受け継がれてきた感性ではないでしょうか。

神道のお祭りQ & A

神道のお盆はどうする！？

平成16年3月9日発行

新宮神社発行

企画編集制作

宮司・森國 英夫（C）

Copyright (C) 2004 Morikuni hideo. All rights reserved

子授け・安産・保育・初宮詣・七五三・
厄祓・新車祓い・諸祈願ご相談ください。

十市保育所裏上鎮座（車で上れます）

平成16年3月吉日

新宮神社宮司・森國英夫

〒783 - 0086

高知県南国市緑ヶ丘1 - 1701

Tel 088 - 865 - 5123

FAX 088 - 865 - 5404

「新宮神社」

<http://www.amy.hi-ho.ne.jp/aicon-m/>

E-mail=shingu@jinja.jp

「土佐日記」

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~aicon-m/>

E-mail=moriku_h@mxj.mesh.ne.jp